

第一節 位置、地形、地質

白鷹町は、山形県の南部、置賜盆地の北端にある。西吾妻大樽川の上流名無沢を源流とする最上川が、置賜盆地の支流を総て合せ、野川との合流点から最上川の上流らしい貫禄を示して流れる。この最上川が北上して、置賜盆地が終るところ、これをはさんで東西一七キロメートル、南北一六キロメートル、面積一五七・一二平方キロメートルの地域が白鷹町である。

東は南陽市に、西は朝日山系国有林に、南は長井市に、北は西村山郡朝日町及び東村山郡山辺町に接している。

極東	東経一四〇度一〇分
極西	東経一四〇度〇分
極南	北緯三八度七分
極北	北緯三八度一七分

町のほぼ中央を最上川が北上し、この兩岸に細長く緩い傾斜の平地を有し、続いて共に山となる。

東北の一角には、虚空蔵尊を祀る白鷹山（九九二メートル）があつて南に丘陵が連り、大窪山・鷹戸屋山（七九二・八メートル）を擁している。西から北には、出羽丘陵の一角大朝日岳に連なる葉山（一、二三六メートル）・大禿森山（一、一五二メートル）・頭殿山（一、二〇三メートル）・尖山（九〇〇・九メートル）・暖日山（九九〇・三メートル）などが起伏している。

最上川は、右岸で耳堂川が諏訪堰に入って思川に流入、貝生川・荒砥川と呑み入れる。左岸で、大鮎貝沢・小鮎貝沢（大ノ沢）、上ノ山沢・中ノ山沢・白力沢・本田沢を合せて絹市川となる。荒井沢・南沢・柳沢川が合流して、八幡

沢となる。大実淵と小実淵の水流を合せて実淵川、その他の小川等を合流し、高岡・蒔沢附近で、平地がなくなり峡谷となって西村山郡朝日町の五百川峡谷に流れて行く。

水田耕作のために分水し利用している主なるものには、長井市長井橋附近で最上川を分水し、東五十川・浅立・広野・畔藤と利用している諏訪堰。実淵川を黒鴨の川前上流で分水し、山口新地と鮎貝で利用している鮎貝堰、実淵川の支流大石沢の水を、横田尻の上ノ山沢並びに中ノ山沢・白ヶ沢に引いて利用しているもの等が代表的なものである。町全体の面積は約一五七平方キロメートルであるが、三分の二は山林牧野である。

最上川の流れにそって、荒砥駅を終点とする国鉄長井線が走っている。

道路は、近年その整備が急速に進み、最上川右岸を今泉―東根（市）線国道二八七号が通り、また今泉―滝野―小滝―山形線が国道（三四八号）となり、さらに荒砥より中山を通過して山形へ県道が通り、全線舗装となっている。左岸では草岡―八幡線、長井―荒砥線、長井―大江線、鮎貝―黒鴨線、鮎貝―荒砥線が県道として主要幹線をなしている。町道も着々と整備され、全線舗装もそう遠い日ではあるまい。

最上川兩岸を結ぶ橋梁として、上流より睦橋・荒砥橋、それに明治十九年より八五年の歴史をもつ渡船に代って、『荒砥町誌』
二七四頁 昭和四十六年黒滝橋が完成、この三つの橋が最上川兩岸にまたがり、白鷹町の円滑な発展の要素となっている。又、大瀬と今平を結ぶ大平橋の存在も貴重である。

最上川左岸の河岸段丘上はおおよそ花崗岩であり、深山・黒鴨以北に黒色頁岩^{けつ}・硬質頁岩の帯となっている。右岸は浅立、荒砥附近に花崗岩があり、白鷹山は安山岩が主体であり、他は大凡灰色頁岩・砂質頁岩・凝灰岩地帯となっている。土壤は「白鷹町水田土壤区分図」〔白鷹町
役場作成〕によれば、最上川左岸地帯は大体において花崗岩質埴壤土であり、右岸地帯は沖積世埴土ならびに埴壤土となっている。最上川左岸の緩傾斜部（主として蚕桑地区）は、第四紀旧層で

花崗岩分解物の堆積したもので酸性が強く、山麓部は小河川による扇状地帯をなしている。また、最上川河岸段丘下は第四紀新層であり、地味が肥えている。最上川左岸地帯でも鮎貝地区の内、森合から鮎貝小学校にかけての一带は、顕著なローム層の発達を見せている。また、実淵川左岸では頁岩層を露呈している。最上川左岸の山地々帯は、標高五〇〇メートルの丘陵地で水成岩（泥板岩・砂岩）、それより上部では角閃花崗岩となっている。

最上川右岸は、最上川が朝日山塊の隆起運動に影響されて平地部の東縁におしつめられ山裾近く流れるため、平地部を少なくしている。各河川のもたらした扇状部も最上川左岸のような発達はなく、貝生川と荒砥川による扇状部が大きなものである。十王から貝生方面の山塊は出羽第三紀層に属し、凝灰岩質砂岩が主でその上層部からは海水産の貝などの化石を見かける。白鷹山塊と朝日山塊の接合地は、置賜盆地の河川を集めた最上川の集水終点となり、菖蒲附近から大江町左沢までいわゆる「五百川峡谷」を成している。また、この峡谷は固い頁岩が川底を形成し浸蝕が進まず、舟航には困難を極めたところである。

白鷹山系は、花崗岩の上に花崗岩性砂岩・頁岩の堆積した丘陵で、白鷹火山の噴出によって大小の沼がつくられている。